彩・菜・栽

2019年9月

防寒、防風対策

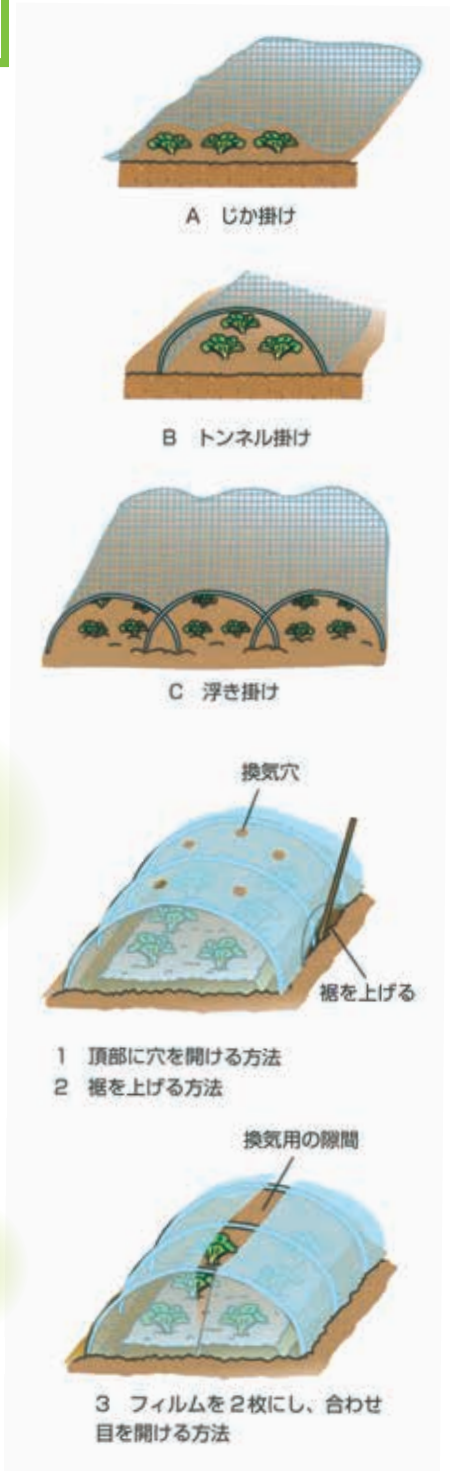
10月に入ると、気温が下がり、秋冬野菜の生育が低下し、それ以降、年内に秋蒔きできる野菜はほとんど無くなります。

防寒、防風の一番簡単な手段は、べた掛け資材（不織布）を用いる方法です。野菜の大きさ、野菜の面積などに応じて図A、B、Cの方法を選択します。

この時期は低温のため露地状態では種蒔きはできませんが、ビニールやポリフィルムを用いてトンネル栽培にすれば十分間に合い、真冬から早春にかけて良品を収穫することができます。保温力はビニールが優れていますが、ポリエチレンでも十分効果を上げることができます。小松菜やほうれん草、小かぶ、春菊、春採り大根などが対象です。

発芽して本葉2～3枚になるまでは、トンネルの裾に土をかけて密閉しておいて構いませんが、生育が進み始めると密閉では日中の気温が上がり過ぎ、軟弱化してしまいますので、晴天日には換気し、28～30度以上には昇温しないよう管理することが大切です。換気の方法は図1～3に示す通りです。換気穴方式は夜間も換気状態なので、保温効果は落ちます。しかし裾に土を掛けておくので、風に対しては強く、野菜の育ちはやや落ちますが、揃い良く育ちます。

さらに保温性能を高めるには、トンネル内に穴開きマルチをして種蒔きしたり、同じくトンネル内の野菜の葉上にべた掛け資材で覆うなど、2通りの方法をうまく併用する場合もあります。

風当りの軽減と霜よけには、古くから行われていた畝内への篠竹立てや栽培床の北側に、南からの陽光を最大限に取り入れるよう、入射角に合わせてよしずを立てて栽培する覆下栽培など、資材を上手に利用することも考えます。

エンドウなどの越冬中の寒風害にやられやすいものは、株元をもみ殻や粗大な堆肥で覆い、風に振り回されないようにしましょう。